

都心の一年

年年歳歳ねんねんさいさい 花相似はなあいにたり

毎年、花は同じように咲いているが、

歳歳年年さいさいねんねん 人不同ひとおなじからず

それを見る人は同じ人だとは限らない

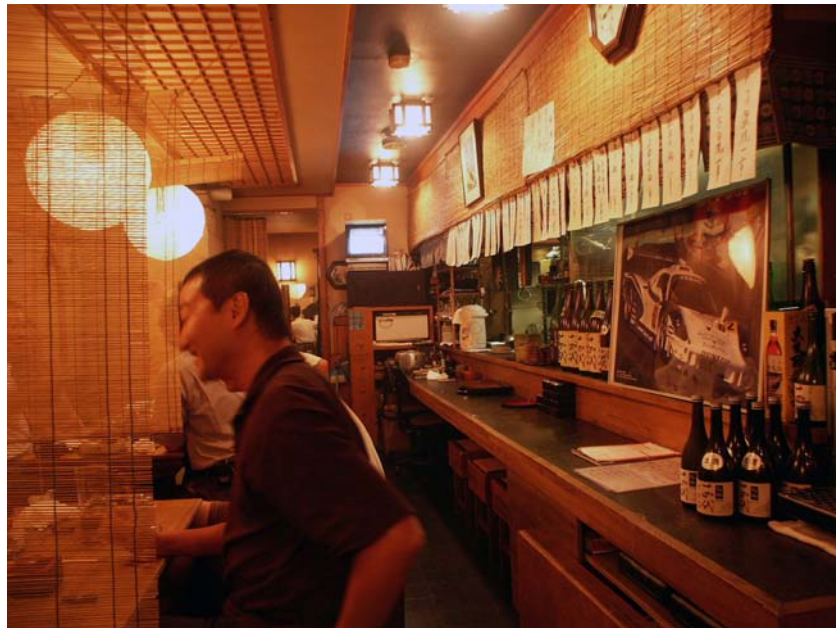
そんな唐詩を思い浮かべながら「都心の異変——桑田そうでん変じて滄海そうかいとなる」を書いてから、もう一年が経つ。実にいろいろな出来事があつたけれど、振り返ると、あつという間の一年だった。とくに何かに忙殺されたという訳ではない。ただ、過ぎてしまったとしか言いようがない。まさに「光陰こういん矢のごとし」である。

イラク戦争や日本企業の再編成などに日常の活動はかなりの影響を受けているけれど、それに埋没するまでにはならない。仕事は結構忙しいけれど、そのために拘束されている気分にはまではならない。政治的関心は強いけれど、それで怒ったり走り回ったりまではしない。カネは欲しいけれど、自分個人のためのものであれば、そのために画策かくさくしたり無理するまでの気は起こらない。食い物に対する関心は相当に強いけれど、行列してまで食べようとは思わない。

ファッションとかブランドも、良いモノは良いとは思うけれど、値段を見ただけで関心が失せる。阪神優勝には驚いたけれど、それを喜ぶ気分にも、それを騒ぐ気分にもならない。ゴルフも止めてから久しく、いくら楽しそうな話を聞いても朝早く起きて遠くまで出かけようという気持ちにはならない。山登りはやりたけれど、北アルプスや南アルプスとは言わず、高尾山あたりで十分だと思いつながらも、出かけないでいる。ドライブも二〇〇から三〇〇キロぐらいも遠出して走れば満足する。

だから時間にも気持ちにも余裕があるはずである。それなのに、気が付いたら絵画館前の銀杏いちょう並木は新緑しんりよくから深緑しんりよくに、そして黄金に変わり、ついに葉っぱもなくなっていた。散歩の折に実のなり具合を観察し、今年こそ早朝に行つて銀杏ぎんなんを採ろうと思つていたのに、その機会を逸いっしてしまった。

酒で大病を患ったのに、また
凝り性もなく飲み始めている。飲み過
ぎだと注意されることが多い。しかし、
昔とは違う。クラブや料亭などは縁遠
く、飲んで歌って騒ぐのは苦手で、近
くの居酒屋で六〇年代、七〇年代のロ
ックなどを聴いて喜んでいる。十二時
過ぎに、もう一軒などということはない。
自宅だったら日本酒を二合も飲むと
ほろ酔いになる。ドクターストップに
なったらいつでも止めると言いなが
ら、タバコもスパスパ吸っている。

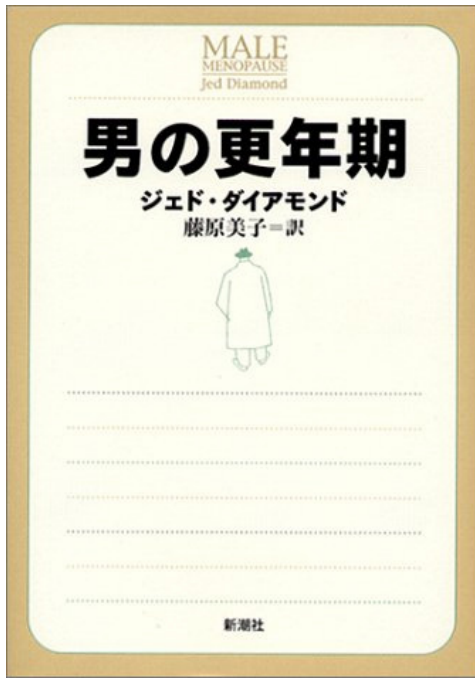


と言って、体調が良いのかと問われると、自信を持って良いと言えるほどでもない。しかし、悪いのかと聞かれると、悪いとも答えられない。どう頑張っても、かつてのようなバカ元気なことはなく、そもそも良い悪いの基準が曖昧あいまいになっているからだ。

もちろん年二回の徹底的な人間ドックと月一回の定期検診は欠かさず、一日に五回の二種類の注射と食中食後の四種類の服薬（と言っても消化酵素、乳酸菌、それとビタミン剤だけ）と就寝前の二種類の服薬（胃薬と抗血小板剤）は続けていている。さらに体調に素直に従って、折を見ては麻布の整体と市ヶ谷はりの鍼はりにも通っている。お陰で数値的にも医療画像的にも、今のところすこぶる健康と太鼓判を押される状態にある。

「男の更年期」

三〇代になると、頑張っている時に、フツと歳を感じるようになる。それをやり過ぎし四〇代に入る頃、昔から厄年やぐどしと言われていた通り、油断していると大病を患う———事実、僕も倒れた。しかし、それを乗り越えようと、何となく六〇歳ぐらいまでは辿たどり着く。そこで還暦という言葉がある通り、また転機を迎える。これをやり過ぎすと、その後しばらくは平穏な時期に入る———こんなことを人生の大先輩たちから、若い頃、何度も聞かされてきたけれど、気が付いたら自分が、そんな話をするようになっていた。



同年代の仲間が何となく集まって飲み始めると、最近では、身体の問題に行き着くことが多い。その中でも今年のビッグニュースは「男この更年期ねんき」と「赤玉あかだまポン」である。男にも更年期が存在する。

たしか、そんな題名の本も出てくるくらい今では知られていることだ。考えてみれば、男でも加齢でホルモン分泌機能が低下すれば、バランスが崩れ、いわゆる自律神経失調症に陥ったとしても不思議ではない。それに身近な友人たちが陥るようになるは無視は出来ない。

Mさんも今年初めに陥ったらしい。普段は明るいMさんが妙に元気がない。病院でいろいろ調べただけけれど、問題はないという。でも、調子が悪い。そんなことを綿々と言う。Mさんにしては珍しいことである。でも、直ぐにまったく同じような話をTさんに聞いたことを思い出した。それで聞き終わるや否や叫んだ。それは「男の更年期」に違いないと……。そうしたらMさんは少し恥ずかしそうに精液に血が混じるのだと続けた。これも実はすでにTさんから聞いていた話だった。それで、続けて「それは赤玉ポンド」と追い打ちを掛けた。

Tさん曰く、毛細血管が老化すると膨張時に切れ、それが混入するようになるのだという。悪い病気ではないかと心配で、病院で検査したけれど問題は見つからない。最後に主治医が「実は私もそうなんですよね」と言われ、ホッとすると同時に改めて年齢を感じたと、酔っぱらって語った。それを聞き終わるや僕は「それがきつと、昔から言われている赤玉ポンド」と叫んだ。「そうか、間違いなく赤玉ポンド。すると俺たち後は空気だけか」ということで、大笑になった。

この話をMさんにした。Mさんはホッとしたようだった。しばらくしてからMさんから聞いた。「やつぱり赤玉ポンドでした」——その電話の声は、ホッと安心し弾んでいたけれど、どことなく悲しそうに聞こえた。

これではほぼ同世代の飲み仲間の五人のうち三人が赤玉ポンドになった。その一人、作家のSさん（このシリーズを読んでいる人には直ちに誰だか分かると思うけれど、ここではあえて名前を伏せる）に到っては、酔うと赤玉ポンドということを目にする。目にするのは良いけれど、そうでないヤツは変だと主張する。ついに

は、まだ赤玉ポンではないと僕が抵抗すると「だいたい、おまえはおかしい。これカツラだろう」と髪を引つ張る。

こんな他愛ないやり取りが心地よい。ちなみに、もう一人の同い年のMさんの口癖は「人間、全身の毛の本数は同じである。これを相対毛原理という」というセリフだ。実はMさんは見事なハゲと見事な胸毛の持ち主である。その上、幾多の修羅場を潜り抜けてきたような貫禄がある。とても太刀打できない。「おまえも赤玉ポンか」とでも尋ねようものなら、「おまえらバカか」という雰囲気である。ベルトをゆるめ、「おい、勝負しよう」と結構、真顔で言いだしかねない。こうなれば逃げるしかない。話題を変えるしかない。

「六本木ヒルズ」



幸い、当たり障りのない話題はいろいろある。この数年前から都心では大規模再開発事業が花盛りで、昨年は品川や汐留などが営業を開始し、東京駅前の丸ビルも生まれ変わった。そして今年の四月二十五日には、いったいどんなものになるのかと興味津々だった六本木ヒルズがついにオープンした。「なんだ、まだ行っていないのか」、「あそこは凄かったぞ」、「あれじゃ駄目だな」など、各人各様のコメントをいくらでもできる。

今、住んでいるマンションからは六本木ヒルズ森タワーがよく見える。写真、中央右の茶色のノッポの建物（一フロア二軒という億ション）の後ろに広がる迎賓館や東宮御所がある緑の一带の右奥に高く聳^{そび}えている。二段重ねになっているような特異な形状のビルだ。（矢印のビル）

日々、目に飛び込んでくるビルだし、その近くに住んでいたこともあるので無視はできない。早速、オープンの翌日、土曜日の午前中に様子を見に行つた。まだ混んでいなかった。地図をもらってトレンディーだという店をうろうろする。でも感性が麻痺したのだろう、そそられない。結局、折角来たのだからということで、カネを払い、展望フロアに行つた。

東京タワーよりも遙かに眺望が良い。東西南北を眺める。昔、住んでいた元麻布のマンションや三フロアをオフィスにしていた六本木飯倉片町のマンションなども識別できて興味が尽きない。

いま住んでいる高層マンションも遠くに見えた。写真では地平線に飛び出ている塔（防衛庁の無線塔）の左側にある建物だ。周囲に高層ビルがないのでひとときわ目立っている。（矢印のビル）

ビルを出ると足は自然に昔馴染みの麻布十番に向かった。徒歩五、六分の距離にある商店街は見違えるほど綺麗になった。街路樹のカツラの新緑がみずみずしく、ハナミズキの花が満開だった。





振り返ると六本木ヒルズを構成する森タワーと高層の住宅棟群の偉容が目飛び込んできた。どんな人が入るのだろう。分譲マンションはもちろん億ション。賃貸マンションは月額家賃二〇〇万円ぐらい。そこに等価交換で部屋を貰った地元の人たちも住んでいるという。でも普段の生活が実感できない。「大変なのじゃないかなあ」と思わず口に出た。



日本航空の雑誌「アゴラ」の十一月号に「六本木ヒルズ、その後」という特集記事が載っていた。「オープン後僅か二ヶ月で来場者一〇〇〇

万人を超えた六本木ヒルズ。『食事と買い物を楽しむ街』という情報が先行しているが、本来は住民、就業者併せて二万五〇〇〇人という地方都市並の顔を持つ。開業して六ヶ月。暮らし、働く人々の六本木ヒルズを検証してみた」。居住者人口は二〇〇〇人だという。

そのトップが地元で昔、金魚屋をやっていた再開発組合理事長の話だ。道幅が狭く消防車も入れず「以前は火事や天災が起こったら、どこに逃げようかと、そんなことばかりを考えていました」「安全な街になるのなら、ご先祖様も許してくれる」と決め、再開発に同意し、理事長も引き受けた。現在は四一階の四LDKに暮らし、奥さんと娘さんの三人で太極拳を習う日々を過ごす。「再開発の話を受けてから十七年。当時は五六歳だった僕も七三歳になりました。完成するまでは一日でも早くと思っていました。今ではできるだけゆっくりと時の流れを感じていたいと思います」と語る。そんなことが書かれていた。

僕が麻布十番で地元の人から小耳にした話とはまるで違う。等価交換で部屋をいくつか手に入れた人たちは、部屋の家賃収入で生活する計画だったのに、借り手が見つからない。それなりに自分の住んでいる部屋を含め、高い管理費だけ払わなければならぬ。固定資産税の負担もある。とても生活が成り立たないということで、このところ安値で叩き売って引越す人が相次いでいる。だから「表には出ていないけれど、えらく値下がりしているようですよ」という。

確証はないけれど、ありそうな話である。ちなみに六本木ヒルズ森タワーは地上五四階、高さ二三八メートル、一フロア四五〇〇平米で、その主なテナントは、グッドウイルグループ、ゴールドマンサックス、コナミグループ、コムスン、サイバード、J W A V E、フレッシュユネスバーガー、ヤフー、楽天グループ、リーマンブラザーズ（五〇音順）。何となく近寄りたくなる陣容である。

蔓珠沙華、萩、金木犀



ところで先ほど麻布十番のハナミズキの話をしたけれど、それ以外にも都心の真ん中の身近なところで、結構、季節を感じさせる草花や花木が見られる。例えば

ば、神宮外苑である。春はしだれ桜などが綺麗だし、夏は深緑そして秋は黄金の銀杏並木が見事だ。さらに今年は銀杏並木の外側のちょっと人目に付きにくいところに蔓珠沙華が咲いているのを見付けた。

彼岸花ひがんばなという名前の通り、ちょうど秋の彼岸のころだ。寺の境内や墓地によく咲いており、凄すこい毒がある、死人花しびとばなとも呼ぶと聞かされていたので、子供の頃は、その燃えるような赤が血のように見えて気持ちが悪かった。「赤い花なら曼珠沙華まんじゆしやげ オランダ屋敷に雨が降る」という歌も、もの悲しさを駆り立てた。

赤い花なら 曼珠沙華まんじゆしやげ

オランダ屋敷に 雨が降る

濡ぬれて泣ないてる じゃがたらお春

未練みれんな出船でせんの あゝ鐘かねが鳴る

ララ鐘かねが鳴る

(「長崎物語」)

調べたら、曼珠沙華まんじゆしやげは中国原産で、確かに猛毒だという。中国では球根を砕き水に溶かし殺虫剤にしたり、球根を乾燥させた粉末をネズミ取りにしたりした。日本でも古くは土蔵の壁土に混ぜてネズミの侵入防止に使った。墓地に多いのはネズミや獣による土葬の死体荒らし対策のためなどと書かれていた。やっぱり曼珠沙華まんじゆしやげの赤はただ者ではないのかもしれない。



四ツ谷から上
智大学横の土手
を通り、紀尾井
坂へ出て、そこ
から弁慶橋へと
抜けるルートも
四季を通じて楽
しめる。

花見スポットとしてすっかり有名になっている土手は、深緑の夏の早朝は絶好の散歩道になるし、枯れ葉の時期は都心とは思えない趣おもむきがある。それに紀尾井坂の銀杏並木、紀尾井坂と弁慶橋の間「紀尾井町通り」の八重桜も見逃せない。



さらに今年の秋には、「紀尾井町通り」沿いの清水谷公園で萩を見付けた。大学時代、清水谷公園はデモのメッカで、会場所になっていた。その名残なのかもしれないけれど紀尾井坂で暗殺された大久保利通を悼む碑がポツンと建っている、何となくうらぶれた雰囲気のところだった。周りから取り残されたようなところだった。

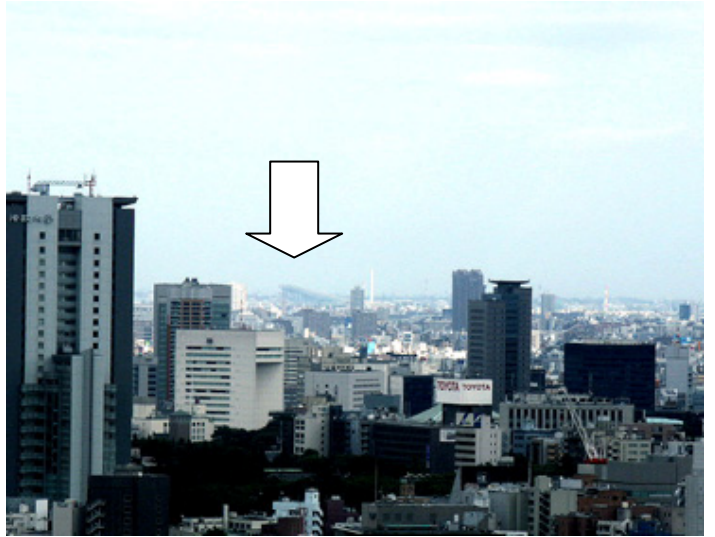


それが生まれ変わった。「清水谷」の名前の由来となった清水の湧く池も、碑の周囲も遊歩道も、整備され、鬱蒼と草木の茂る雰囲気を残しながらも見違えるほど綺麗になっていた。そして清水にちなんだのだろう、玉川上水の水を各所に給水するためには木製の樋が使われたが、その分岐のために使われた大きな石枡も展示されていた。

ここで萩の花を見付けた。根本には藪、枯や猫じやらしや蚊張吊草などが生い茂る。都心ではすっかり忘れられた風情である。無性に嬉しくなってしまった。

そして自宅近くでも、横道に入ると、自動車の騒音は聞こえなくなり、金木犀の強い香りが漂ってきた。フツと子供の頃にタイムスリップするような懐かしさを覚える香りである。もう秋は深い。





二八階の自宅から下を眺めると、家並みの間に紅葉が目立つようになっていた。遠く千葉方向には幕張の高層ビル群の左手にクッキリと人工スキー場「ザウス」の異様が見える。一九九三年の開業から約十年経って、いま解体が進められている。間もなく姿が見えなくなるだろう。

かつては宴会などが頻繁に行われていた某銀行の立派な会館は壊され、その後には野村不動産が建設している六階建てのマンションが間もなく完成する。これが手前、真下に見える。その少し先にあつた別の銀行の行員寮も壊され、つい先日、その更地で工事開始の儀式が行われた。さらに、その先では写真にあるようにショベルカーやブルドーザが活躍している。三菱地所がマンション建設を進めている。ここも、ちよつと前までは某銀行の豪勢な会館が建っていた場所である。



この写真に映っている低層の建物のほとんどが官公庁の宿舎と金融機関の会館や行員寮である。おそらく、この数年の間に、ほとんどが取り壊され、マンションなどになり、風景は一変するだろう。

都心は絶え間なく、あたかも自律した意志を持っているかのよう姿を変えている。その様子を眺めていると月日は過ぎてゆく。